

A・MUSEUM

vol.80
[2014. 9. 15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



秋の景(第17回「いばらき自然環境フォトコンテスト」入選作品 撮影:桑田 清 撮影地:北茨城市)

棚田の実り

今回の茨城県の絶景は「^{たなだ}棚田の実り」です。棚田とは、山の傾斜^{けいしゃ}地に階段のようにつくられた田んぼのことをいいます。茨城県ではおもに県北地域の山地の谷間などでみることができます。棚田は、お米を作るだけでなく、小さなダムの役割をしており、森や川の上流から流れてくる雨水を一時的にためることで、洪水や山の斜面が崩れるのを防いでいます。このような自然を守る役割をもった棚田のなかに、人手不足などで使われなくなり、洪水や土砂崩れがおこりやすくなっているところがあります。棚田は、古いものでは江戸時代以前から私たちの先祖が守ってきたものです。茨城県では、棚田を守るために、地域住民による保全活動を支援し、農業生産活動を^{しんこう}振興する事業を推進しています。(企画課 小幡和男)



世界遺産の棚田の風景(中国雲南省)

開館20周年記念イベントのお知らせ

1994年11月13日にオープンした当館は今年の11月13日で20回目の誕生日を迎えます。この誕生日にはこれまでお世話になった方々をお招きし、記念式典を開催する予定です。また、11月には来館者の皆さんにもご参加いただける楽しいイベントを企画しています。海外から来日する講師や、日本を代表する著名な研究者による講演会、夜の恐竜ホールという特別な雰囲気のなかで名曲を聴くコンサートなど、特別なイベントがもりだくさんです。ぜひご参加ください。

記念講演会 ようこそ！カリフォルニアの植物の世界へーロサンゼルス自然史博の野外施設に込められた自然ー



Carol Bornstein

日時：2014年11月15日(土) 13:30～15:00
 場所：ミュージアムパーク茨城県自然博物館 映像ホール
 講師：キャロル・ボーンスタイン氏（ロサンゼルス郡立自然史博物館。以下ロス博）
 対象：小学生以上（小学生は保護者同伴）300名（事前申込み）
 内容：ボーンスタイン氏は当館の姉妹館であるロス博で野外施設のディレクターを務める植物と園芸の専門家です。カリフォルニアの植物とロス博に新設した野外展示や分館であるペイジ博物館の更新世植物園についても語ってくれます。

記念コンサート ミュージック・ウィズ・ダイナソー 夜の恐竜ホールで楽しむ名曲の数々

日時：2014年11月15日(土) 17:30～19:00
 場所：ミュージアムパーク茨城県自然博物館 恐竜ホール
 対象：どなたでも 200名（事前申込み）
 後援：ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会
 協力：坂東市

曲目：子どもから大人まで楽しめる名曲を選曲しています

- ・夜の女王（モーツァルト「魔笛」より）
- ・誰も寝てはならぬ（プッチーニ「トゥーランドット」より）
- ・象、白鳥、化石（サンサーンス「動物の謝肉祭」より）
- ・エーデルワイス
- ・Let it go（「アナと雪の女王」より）
- ・いつも何度でも（「千と千尋の神隠し」より）
- ・さんぽ（「となりのトトロ」より）

※曲目は変更になることがありますので、あらかじめご了承ください。



相島百子 氏(ソプラノ)



椎屋 瞳 氏(ソプラノ)



水野亜歴 氏(テノール)



滝本紘子 氏(ピアノ)

記念講演会・ブース型体験教室 自然史まつり in いばらき 自然史学会連合共催イベント

期日：2014年11月23日(日)

★講演会 第一線の研究者が語る進化の謎 10:00～12:30

場所：ミュージアムパーク茨城県自然博物館 映像ホール

対象：小学生以上 300名（事前申込み）

講師：・真鍋 真 氏（国立科学博物館）「ミッシングリンクとしての恐竜」
 ・遠藤秀紀 氏（東京大学）「死体から解き明かすからだの歴史」
 ・五箇公一 氏（国立環境研究所）「生物進化の歴史と未来を脅かす外来生物」
 ・野崎久義 氏（東京大学）「ボルボックスの仲間を用いて探るオスとメスの進化」

★ブース型体験教室 体験!わくわくミュージアム 13:00～16:00

場所：ミュージアムパーク茨城県自然博物館 セミナーハウス

対象：どなたでも 自由参加

内容：昆虫・コケ・珪藻・ヒト・海藻・キノコ・火山など
 それぞれのテーマのブースで楽しく学ぶ体験教室



真鍋 真 氏



遠藤秀紀 氏



五箇公一 氏



野崎久義 氏

企画展の開催

20年のあゆみと今後の展望2

開館20周年の節目の年に当たり、連載している20年のあゆみと今後の展望シリーズの2回目は、企画展の開催についてです。

現在開催中の開館20周年記念企画展「新茨城風土記－ひとと自然のものがたり－」を入れて20年間に開催した企画展の回数は61回、それに市民コレクション展など14回の小規模な特別展をあわせると、開催回数は75回を数えます。企画展の開催は、当館の最も重要な事業の1つに位置づけられています。それは、常設展示だけでは成し得ないタイムリーな話題をわかりやすく来館者に提供するだけでなく、企画展開催を契機に充実した博物館資料の収集を目指すこと、そして、海外を含めた関係機関との連携によるネットワークを構築することを目的としているからです。

当館の年間入館者数はここ数年40万人前後で推移していますが、来館者アンケートの集計から入館者のうち約7割がリピーターで、企画展の見学を目的として来館する人が、常設展示の見学や野外施設の利用を目的とする人を上回っています。また、アンケートでは当館の企画展開催に関する情報を半数近くの人々が事前に知っていたという結果もでており、いかに来館者が企画展に期待を寄せているかがうかがえます。



北茨城市大津港でのアンコウ調査（企画展の調査風景）

企画展のテーマとその準備にあたるプロジェクトチームは、開催3年前に編成します。テーマについては、一般の来館者からの声、博物館モニターからの提案なども参考にします。プロジェクトチームは、5～6名の学芸員と広報、予算担当の職員で構成されます。約20名の学芸員は、およそ1年に1回は企画展に携わることになります。準備期間が3年間あるので、1人が3つ程度の企画展準備にいつも携わっている状況にあります。学芸員の仕事のなかで企画展はかなりのエネルギーを費やすものとなっていますが、そのたとえば入館者数や来館者の満足度に即反映されるので、やりがいのある仕事です。

企画展は開催方法により、国内協力展、研究報告展、海外協力展に分かれます。通常の企画展は国内協力展で、関係機関から展示資料の提供やアドバイスなどの協力を得ながら実施しています。また、3年に1度の割合で、県内の自然調査の成果を公表する研究報告展を実施しています。さらに、数年に1回の開催を目標に海外協力展を実施しています。

今後も企画展の開催は、当館の活動の中心として充実を図ります。これからも皆さんからのご支援をよろしくお願いします。（企画課 小幡和男）



金砂磯出大祭礼の神輿の展示作業（企画展の展示作業風景）

企画展

茨城県自然博物館は、この11月に開館20周年を迎えることとなりました。

館内に掲示してあります開館以来の企画展のポスターを眺め、20年間1度も休むことなく開催できたことに深く感銘し、それに携わった方々に思いを馳せたところです。

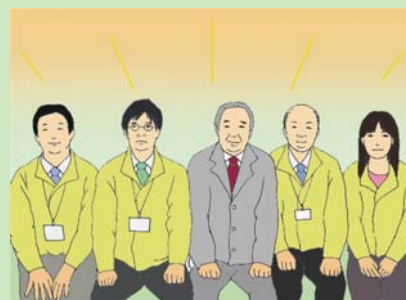
企画展は博物館の標本の収集・調査研究の成果を県民に還元する博物館の最も大切な機能の1つです。学術発表をベースに来館者にわかりや

すく話題性に富む内容とするため、民俗文化や絵画など他の分野とのコラボも取り入れております。

企画展の担当者は学術と事務の両分野で構成され、概ね7名程度ですが、今回の企画展（新茨城風土記）ではその倍の人員で対応しました。企画書の作成から、予算、館内外の資料の確認、折衝、運搬、展示、広報、返却まで3年の期間を要します。企画展示をご覧の際は、3年の年月の重み、担当職員の奮闘ぶりにも思

コラム by director SUGAYA

いを馳せてみてください。企画展は人も育てます。



イラスト：上脇田直子（ミュージアムコンパニオン）

クマムシの教材化

研究ノート 1

昨年度(2013年)の4月と今年度(2014年)の6月のサンデーサイエンスで、「クマムシ」という動物を観察するイベントを行いました。クマムシとは、緩歩動物門に属する、体長0.1~0.5ミリメートル程度の小型の動物のグループの総称で、円筒状の体型で8本の脚をもちます。その形とゆっくりと歩く姿はまさしく小さな熊で、英語でも「water bear」とよばれています。身近なところでは「ギンゴケ」というアスファルトやコンクリートに生えるごく一般的なコケなどからみつけ出すことができます。

クマムシの特徴の一つに「乾眠」という能力があります。周辺の環境が乾燥してくると、自らを「樽」という乾燥状態にして、耐え忍ぶというものです。樽の状態になったクマムシは、 -273°C の低温から $+150^{\circ}\text{C}$ の高温、高い圧力や放射線などにも耐えることができるようになります。この能力から、テレビなどで「最強生物」と紹介されることもあります。

さて、この可愛らしい外見でユニークな生態をもつクマムシを観察するためには、いくつかの作業手順があります。観察機材は、シャーレ、実体顕微鏡、ピペット、スライドガラス、生物顕微鏡などです。まず、ギンゴケをみつけてきて、シャーレなどの容器にほぐ

して水に浸し、クマムシをコケからはい出させます。次に、実体顕微鏡を用いて30倍の倍率で水の中を覗き、クマムシを探し出します。クマムシがみつかったら、先の細いピペットを使ってスライドガラスに移します。その後、生物顕微鏡を100倍で観察すると、大きく拡大したクマムシを観察することができます。

私は、このような手順で行うクマムシの観察を、中学校の教材にできないかと考えています。中学校学習指導要領では、第2分野の内容で、「観察器具の操作、観察記録の仕方などの技能を身につけ、生物の調べ方の基礎を習得すること」とあります。この文章にある「観察器具の操作」には、実体顕微鏡と生物顕微鏡が入っており、両方ともクマムシの観察では欠かせない器具です。また、クマムシ自体、動きがユーモラスで親しみやすく、生態も興味深いものがあり、生徒の心を惹きつけるよい材料となります。

しかし、教材化には課題があります。まず、どこのギンゴケにも必ずいるとは限りません。また、ピペットの操作には、ある程度、熟練した技能が必要となります。今後、生徒が観察に専念できる作業手順の研究を進め、生き生きと生物の観察について学べる教材にしたいと考えています。
(教育課 潮田好弘)



サンデーサイエンスのようす



トゲクマムシの一種

クサガメ

クサガメは子どもは「ゼニガメ」とよばれ、成体になると30cmほどになります。アジアが原産で江戸時代以前、人為的に日本に移入されたと考えられており、現在では日本中の平地の流れの緩やかな河川や湖、池沼などに生息しています。当館では第3展示室の下流の水槽とディスプレイケースでみるができます。

ところで、皆さんはクサガメの名前の由来をご存じですか。それは敵

に襲われると足の付け根からくさい臭いを出すため、「臭(クサ)いカメ」でクサガメなのです。しかし、当館で飼育されているクサガメは人間に慣れているため臭いを出しません。また、カメにとって欠かせないことが日光浴です。「甲羅干し」ともいって、体温調整やビタミンの補給を行うほか、寄生虫が体につくのを防ぐはたらきもしています。

水面に顔をのぞかせたり、水底を軽快に泳ぎ回ったりする愛くるしい

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー

姿をぜひご覧下さい。
(ミュージアムコンパニオン 飯島杏奈)



クサガメ

茨城県内のアライグマの現状

研究ノート 2

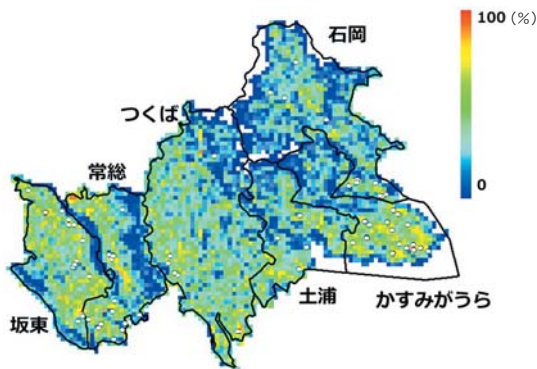
茨城県では、特定外来種であるアライグマの根絶を目指して、2010年5月にアライグマ防除計画を策定しました。現在、関係市町村と協働して作業を進めています。しかし、その後も増加傾向は続き、2013年度には、ついに全県での捕獲数が120頭に達する事態となっています。今回は、これまでに集められたアライグマの生息情報と、防除個体からの生理情報を用いた、筑波大学大学院生命科学研究科修士課程の落合菜香さんとの共同研究の結果について報告します。

この研究の大きな目的は二つで、ひとつは県内でのアライグマの確認地点情報から、アライグマの生息分布の予測を行うことでした。マキシマム・エントロピーモデルという統計的な手法を用いて、県南・県西地域の6つの市で、2009年～2013年までに得られた計124件の分布情報から検討を行いました。その結果、森林の辺縁の長さ、景観の多様度、水辺の長さなどが、アライグマの生息確率を高めることが示されました。これは、“森林が点状に存在する農村地域”ということになり、まさに県西・県南の一般的な景観と一致します。つまり、今回のモデル解析からは、ほぼすべての地域がアライグマに好適な生息環境であることが示されました。原産地の北米では、アライグマの好適な生息地が限られ

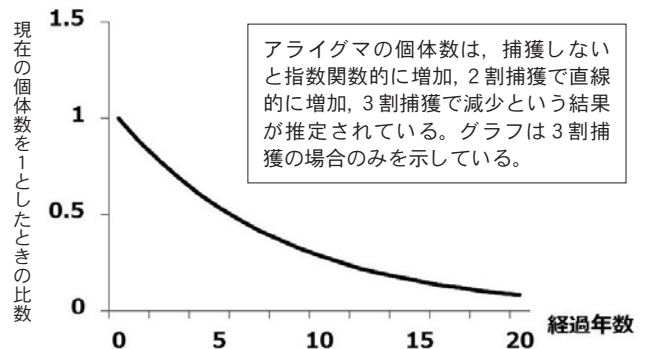
ていることと対照的で、まさに本県がアライグマ天国になり得ることを教えてくれます。

もうひとつの目的は、防除個体から得られた性、年齢、出産経験個体の割合、出産の場合の一回当たりの産子数などから、今後どのように茨城県でのアライグマの集団が増えていくかと予測することでした。この分析の結果、アライグマの年齢の構成ピラミッドは、2013年に入って0歳個体の割合が急激に増えたこと、10か月齢以上のメスでは95%が妊娠していたこと、さらに1回あたりの産子数は平均4.5頭と日本の他の地域よりも高いことがわかり、繁殖率の高い集団であることが明らかになりました。これらの結果を用いて、レスリー行列という統計解析から今後の集団の推移予測をしてみると、仮に捕獲を行わないと生息数は指数関数的に急速に上昇すること、全個体数の3割の捕獲を20年間継続してようやく根絶に近づくことが示されました。

とはいえ、本県での捕獲数が大幅に増加していないことは、防除計画が一定の効果を挙げているとも推定できます。今後も防除データを用いた注意深いモニタリングが必要なところです。（教育課 山崎晃司）



県南・県西6市でのアライグマ生息確率予測（赤や黄になるほど高くなる）



今後のアライグマ個体数の変動の予測

ショウジンガニ

皆さんは磯遊びをしたことがありますか。干潮時にできる潮だまりには、多くの命と触れ合える感動的な出会いがあります。今回は、そんな磯で出会えるショウジンガニをご紹介します。

甲は丸みのある四角形をしており、体をおおう赤褐色の粒列が特徴的で、茨城県の岩礁でもよくみられます。

当館展示室にいるショウジンガニは私たちが実際に磯まで行き、採集してきた個体です。動きが素早いので、

捕まえるのにとても苦労しました。

自分で採集した生物には、特別愛情が湧いてしまうものです。水槽の点検のときでも、つい探してしまいます。餌の時間には、他の魚にとられないようアジの切り身などを与えています。その時は、俊敏に動くようすがみられます。

普段はあまり動かないので、餌の時間がショウジンガニをみつけるチャンスです。

おさかな通信

皆さんも海の水槽の前では、磯遊びにきた感覚でぜひさがしてみてください。（水系担当 藪内雅英）



ショウジンガニ

ツクバハコネサンショウウオ

収蔵品紹介

すでに、本誌75号の表紙で紹介しましたが、2013年、茨城県中央部の筑波山や加波山に生息するサンショウウオが新種であると発表され、「ツクバハコネサンショウウオ」と名づけられました。

当時、当館はこのサンショウウオの標本を収蔵していなかったで、地域のデータベースとして機能するという役割を果たせず、歯がゆい思いをしていました。そんなとき、当館の調査研究の助言者である廣瀬誠氏から、1985年に筑波山で採集された個体の寄贈をお申し出いただき、当館に収蔵することになりました。

廣瀬氏は、茨城県環境アドバイザーとして県内のさまざまな地域で自然観察会を行っています。また、1971年に、茨城県の涸沼で、ヒヌマイトトンボを発見された方です。



寄贈されたツクバハコネサンショウウオの液浸標本

ツクバハコネサンショウウオは、筑波山や加波山の溪流付近に生息しています。幼生の姿で2年以上を水中で過ごすため、同じ場所に違う大きさの個体をみることができます。幼生は、頭部が扁平で、指に爪をもち、あしの後ろ側がひれ状の膜になっていて、流水で生きるのに適しています。3年目になると、頭部は丸みをもち、目は飛び出し、鰓は小さくなっていきます。そして亜成体となり陸上生活に移ります。成体になると、昼間は大きな岩や倒木の下に身を隠し、夜になると動き出して小動物を食べるという生活をします。このため、なかなか姿をみることはできません。

今回寄贈された標本は、体長が13cmほどの成体です。当館では、この標本を大切に保管し、研究に活用していきたいと思います。（教育課 潮田好弘）



ツクバハコネサンショウウオの幼生（生体）

秋の空の「赤とんぼ」

季節の話題

「夕やけ小やけの 赤とんぼ 負われて見たのはいつの日か」

歌詞中の「赤とんぼ」とはどんなトンボでしょう。トンボの分類では「アカトンボ」は種名ではなく、アキアカネやナツアカネ、ノシメトンボなどのアカネ属のトンボを指すことばとしてよく使われます。トンボのオスでは成熟するにつれ体色が変化するものが多く、多くの「アカトンボ」のオスは文字通り成熟するにつれ体色が赤くなります。「アカトンボ」の代表ともいえるアキアカネは初夏に羽化すると山地に移動します。羽化したてのオスの腹部は黄色ですが、夏の盛りを山で過ごしたのち、秋のはじまりとともに里地に戻る頃には赤くなっています。しかし、「アカトンボ」の中には、成熟すると体色が青くなるナニフトンボや黒くなるムツアカネという種もあります。一方、「アカトンボ」以外にも、体色が「赤いトンボ」は多くいます。初夏に開けた池や沼でよくみられるショウジョウトンボ、湿地に生息する世界最小のトンボの一種であるハッチョウトンボ、本県では希少種となっているベニ

イトトンボなどです。

私にとっての「アカトンボ」は、やはり秋の空に群舞するアキアカネ。近年、アキアカネの個体数が減少しているといわれています。その原因は、産卵する水田に使用される農薬の影響や水抜きの時期が早まったことなどさまざまです。秋の空に「アカトンボ」が舞う風景を探してみませんか。（資料課 中川裕喜）



アキアカネ(左上) ノシメトンボ(右上) ショウジョウトンボ(左下) ハッチョウトンボ(右下)
(撮影:今井初太郎)

トピックス

〇海の日イベント

毎年、海の日にはたくさんのイベントが実施されますが、今年は茨城県立海洋高校の生徒の皆さんに協力をいただき、イベントを実施することとなりました。これは、開館20周年記念企画展「新茨城風土記ーひとと自然のものがたりー」の関連イベントとして行われ、茨城の海の担い手を養成する海洋高校の取り組みを紹介するために実現したイベントです。

イベントでは、海の作業におけるロープの重要な役割を説明してもらった後、コースター作りを行いました。コースターは、海洋高校の生徒が学校で学習したロープワークの技術を利用して作りました。7色の色鮮やかなロープの中から3色を選び、丁寧に編み込むことでコースターを仕上げていきます。小さなお子さんにとっては少し難しい作業でしたが、高校生たちがマンツーマンで熱心に指導に当たり、参加者の皆さんはきれいなコースターを仕上げることができました。

協力してくれた海洋高校の生徒の皆さん、ありがとうございました。これから茨城の海で活躍する若者の姿がとても頼もしく感じました。(教育課 小泉直孝)



海の日イベント

〇自然観察会「地引き網を体験しよう」を実施しました

8月17日(日)、開館20周年記念企画展「新茨城風土記ーひとと自然のものがたりー」の記念イベントとして、当館元職員で、県の環境アドバイザーでもある舟橋正隆氏を講師に迎え、久慈町漁業協同組合の皆さんにも協力をいただき、自然観察会「地引き網を体験しよう」を日立市久慈浜海岸で開催しました。

茨城の海でみられる魚について簡単なレクチャーを受けた後、いよいよ地引き網体験がはじまりました。80人が二手にわかれて引きましたが、網から伸びるロープは予想以上に長くて重く、参加者は何度も前に出直しては、力を合わせて引き続けました。最後まで引っ張り上げた網の中には、ヤマトカマス、アジ、マダイなどが数え切れないほど入っており、大漁に皆歓声をあげていました。

参加者から、「1回網を引いただけで、あんなにた

くさんの魚が入ったことに驚いた。」「はじめての体験だったが、楽しく、茨城の海に親しみをもてた。」「網を引くのが大変だった。漁師さんの大変さがわかった。」「などの感想がよせられました。茨城の海の豊かさを体感できたイベントでした。(教育課 石田容之)

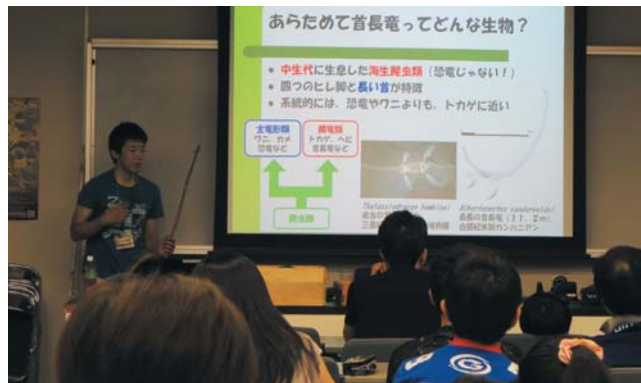


大漁だった地引き網

〇学芸員によるサイエンストーク

当館では、学芸員は日ごろ各自の専門性を生かしたテーマに基づいて調査研究を行っています。内容は自然に関するだけでなく、教育普及や展示など博物館学に関することも含まれています。それらの成果は研究報告などで発表されていますが、博物館の調査研究活動を広く紹介するため、「サイエンストーク」というイベントを開催してきました。

そして、今年(2014年)はさらに多くの方々に参加していただくため、開催方法や内容など、いろいろ工夫を凝らして、より魅力的なイベント「学芸員によるサイエンストーク」として再スタートしました。上半期は「どこまで広がる要注意外来生物アカボシゴマダラ」、「茨城県内の変形菌を追いかけて」、「恐竜時代の海の生物たちの進化と絶滅」が実施され、参加者から好評を得ました。下半期は、「たねの不思議を学ぶ」、「茨城の貝類相」、「生きた化石イチョウの謎」が実施されます。学芸員の調査研究活動の一端を垣間みる絶好の機会ですので、参加してみたいかたがでしょう。(資料課 池澤広美)



8月9日に実施された学芸員によるサイエンストーク「恐竜時代の海の生物たちの進化と絶滅」

東西揃った金砂磯出大祭礼の2基の神輿



展示室に並んだ2基の神輿（左：東金砂神社の神輿、右：西金砂神社の神輿）

開館20周年記念企画展「新茨城風土記ーひとと自然のものがたりー」を7月12日から開催しています。

企画展示室の中央で荘厳な姿をみせるのは、金砂磯出大祭礼の2基の神輿です。平安時代の仁寿元年（851年）にはじまり、72年ごとに行われてきたこの祭りでは、常陸太田市の山中にある西金砂神社と東金砂神社から出御した神輿が、山を下り、日立市の水木浜まで往復80kmをそれぞれ7日間で渡御します。

多様で豊かな自然に恵まれている茨城県について、その自然と人々との関わりから生み出された産業、工芸などをまとめ、未来に伝えたいという本企画展のシンボルを決めるにあたって、山と海を結び、人の一生に匹敵する周期で過去と未来を結ぶこの大祭礼がふさわしいと考えました。そこで、無理を承知で神輿の借用をお願いしたところ、両神社の宮司、氏子の皆さんが快く認めてくださり展示が実現しました。

展示に関しては両神社の全面的な協力により、史上はじめてと考えられる、2基の神輿の同時展示が可能となりました。大祭礼の中では、それぞれの神輿は何日かの間隔を開けて水木浜に到着するため、2基が一度に揃うことは今までなかったといわれます。

実際に展示されている神輿は、両神社のご厚意により、担ぎ棒に触れることができます。この次の大祭礼が行われるのは2075年です。博物館へ足をお運びの際にはぜひ触れていただき、61年後の未来に思いを馳せてください。（教育課 石田容之）

編集後記

今号は、開館20周年記念企画展開催中の発行です。

誌面で紹介した開館20周年記念イベントも盛りだくさんの内容ですが、今秋は、そのほかにも、開館20周年記念「未来の博物館 絵画コンクール」や、募集していた新キャッチコピーの発表などもあります。また、例年実施のイベントもあります。充実した秋になりそうです。（K・N）

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

●常磐自動車道谷和原ICから20分

＜鉄道・バスご利用の場合＞

- 東武アーバンパークライン（野田線）愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅
下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」
乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分

※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで

（入館は16:30まで）

※ペット、遊具、テ

ブル、椅子及びテン

ト等のお持ち込みは

ご遠慮ください。

【入館料】

区 分	本館・野外施設		野外施設 のみ	年間 パスポート
	企画展開催時	通常時		
一 般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

（注）：（ ）内は団体料金（20名以上）

未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

次の日は入館料が無料です。

●5月4日（みどりの日） ●6月5日（環境の日）

●11月13日（茨城県民の日） ●3月21日（春分の日）

●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日

（ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。）

【休館日】

●毎週月曜日

※9月15日（月）、10月13日（月）、11月3日（月）、

11月24日（月）、1月12日（月）は開館し、翌日が

休館となります。

※12月28日（日）～1月1日（木）は休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)
A・MUSEUM (AMUSEMENT + MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課／発行2014年9月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム（アミューズメント＋ミュージアム）をめざしています。